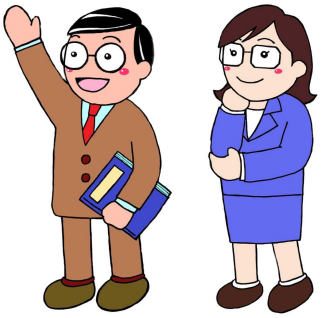
アキタラクティブ　アイ

Akitaractive Eye

～主体的・対話的で深い学びのために～

音楽編

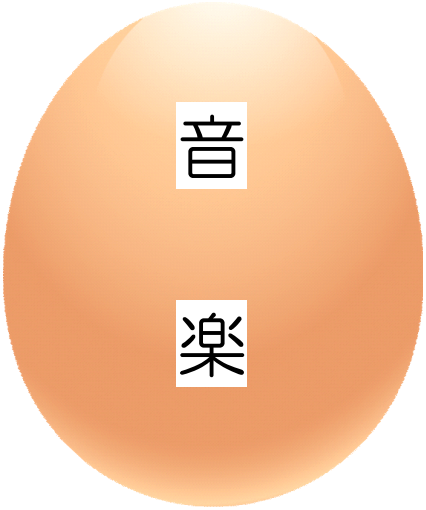


秋田県総合教育センター

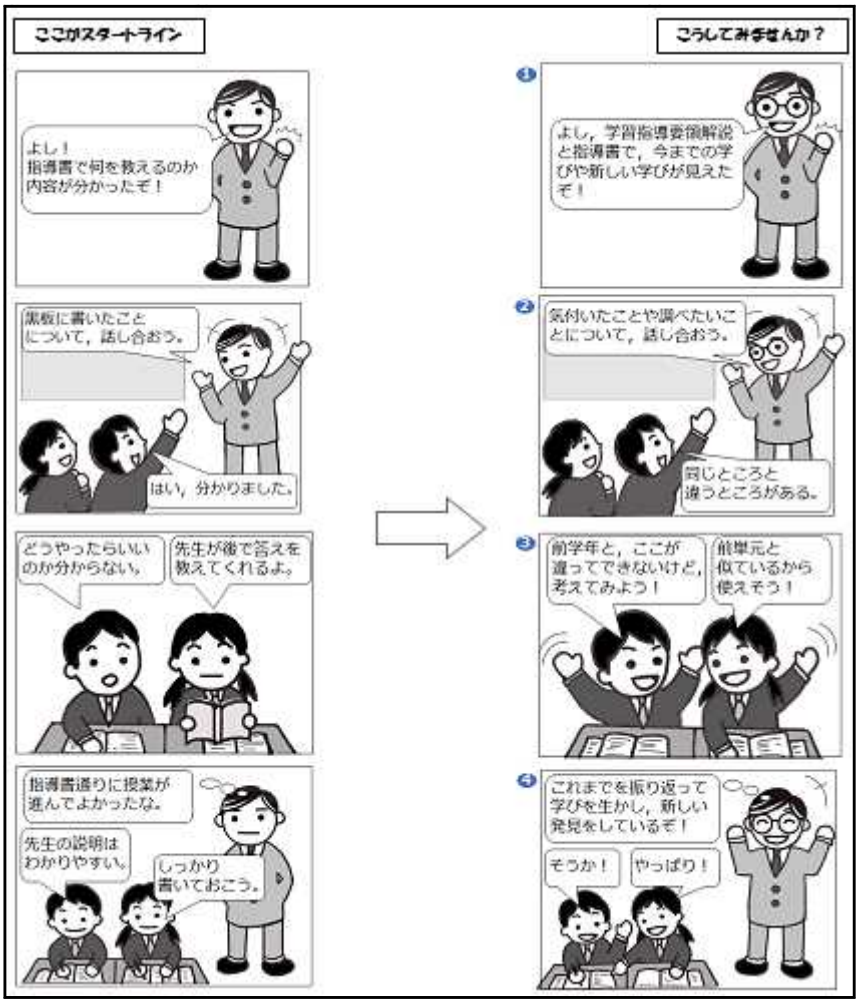
2019.10.10

学びの出発

これまでの学びを振り返り，学びの中での気付きを手掛かりに新たな学びが始まる。



＜授業のイメージ漫画＞



キーワード

音や音楽との出会い・出会わせ方

聴き取った（知覚）ことと
感じ取った（感受）こととの関わり

1 わくわく授業をするために

◇資質・能力を焦点化する

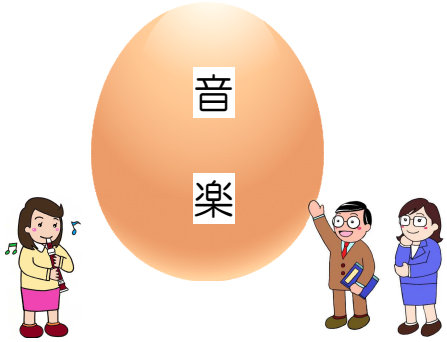
音楽科の授業づくりにおいて，「何を教えるか」がスタートではなく，子どもに身に付けさせたい「資質・能力」，つまり「何ができるようになるか」を明確にすることが重要です。

また，１時間や１題材で身に付けさせたい「資質・能力」を絞り込み，１年間や３年間で「生活や社会の中で音や音楽と豊かに関わる資質・能力」を育成していくことを目指しましょう。

◇入念な教材研究をする

音楽科における教材研究は，まずは「楽曲分析」です。教師が教材となる楽曲の楽譜を十分に読み取り，研究し，実際に自ら表現してみたり鑑賞してみたりするなどして，その音楽のよさや美しさなどをしっかりと理解した上で，授業を構想するということが不可欠です。

例えば，鑑賞教材は同一楽曲であっても演奏者によって印象がずいぶん異なります。どれを選択するかも大変重要です。



2 3 学びをつなげるために

◇教科等の特質を踏まえる

教科の目標は，多くの教科が冒頭に「見方・考え方を働かせて」とある中，音楽科の目標は各校種とも「表現及び鑑賞の（幅広い）活動を通して…」から始まります。それは，音楽は多様な音楽活動を通して学習が行われていく教科であるからです。

つまり，音楽の素材となる音に関心をもったり音楽の多様性を理解したりしながら，子ども一人一人の個性や興味・関心を生かした歌唱，器楽，創作（音楽づくり），鑑賞の活動を行い，そこから「音楽的な見方・考え方（音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，生活（や社会，伝統）や文化などと関連付けること）」を働かせて学習していく教科であることを大事にします。

◇子どもの声に耳を傾け受け止める

人間は，心が動くと話したくなるものです。ですから，子どもの心が動く場面を大切にしましょう。

子どもが音や音楽の存在に気付き，それらを主体的に捉えることによって，音楽の学習は成立します。音楽表現をしたり音楽を聴いたりする過程において心が動き，気付いたことや感じたことなどについて言葉や音楽で伝え合い，自分なりの考えをもったり音楽に対する価値意識を構築したり深めたりしていきます。

また，子どもが感じたことの中から全体で共有すべき事項をうまく使い，「共感」させることも大切です。

4 新たな学びを出発させるために

◇適宜,振り返る場面を設定する

◇課題づくりの場を設定する

「主体的・対話的で深い学び」の実現には，子どもに学びの見通しをもたせることが大切であると同時に，学んだことの意味や価値を振り返り，自分自身の学びや変容を自覚できるようにする場面を意図的に設定することが重要です。

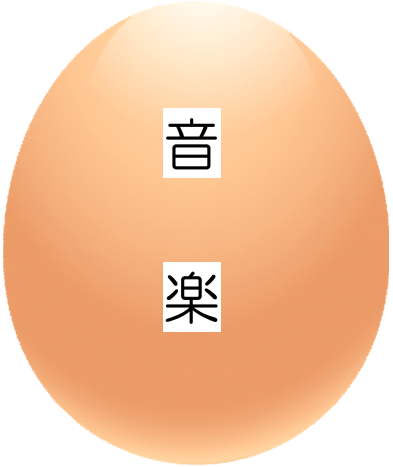
題材や１時間の学習活動の成果，学習の過程における達成状況や変容を確認することで，新たな課題を見いだすなど，次の学びへとつながっていきます。イメージしたことや感情の働きを振り返り，音や音楽が人間の感情にどのように影響を及ぼしたのかを考えることにより，音や音楽を生活や社会に生かそうとする態度の育成にもつながります。

振り返りの際に大切なことは，言葉で考えたりやり取りをしたりするだけではなく，実際の「音や音楽」で確認するということです。

例えば，鑑賞の題材で振り返りをする際，子どもの発言や発表，ワークシートへの記載内容だけで終わっていませんか？　大切なことは，子どものそれらの言葉を実際の音（演奏）できちんと確認することで，真の意味での振り返りになるはずです。

学びの再思考

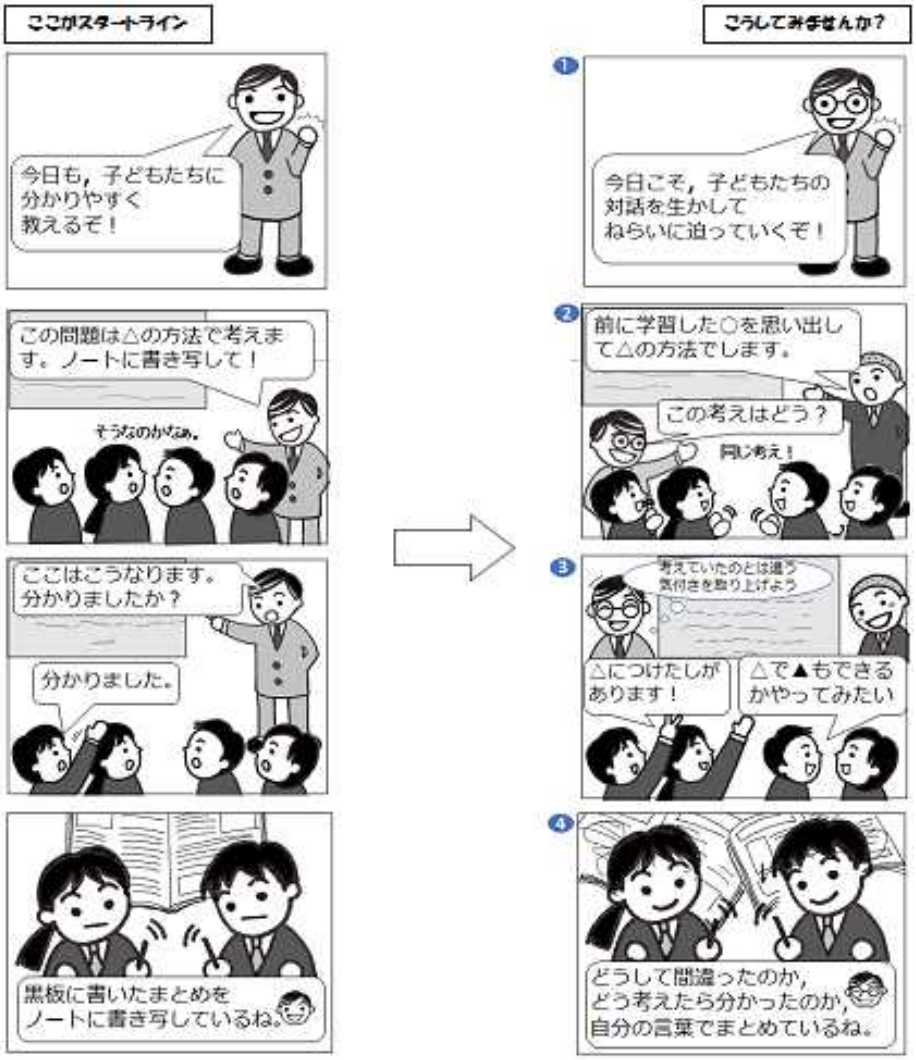
互いの考えを伝え合い，相手の考えを受け止め，自分の考えを練り直す。



キーワード

音楽科の特質に応じた言語活動

思考・判断し表現する一連の過程



1 ねらいに迫る授業をするために

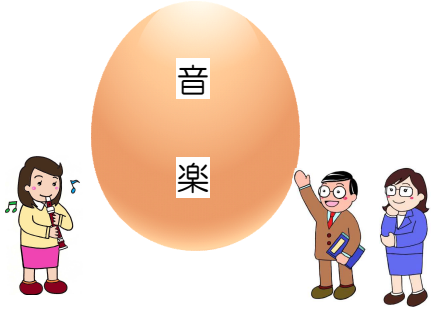
◇学習活動を吟味する　　◇効果的な学習支援を考える

題材構成をする際，次のような視点で学習活動を吟味し，より効果的な教師の支援を考えましょう。

○主体的に学習に取り組めるよう，学習の見通しを立てたり学習を振り返ったりして，自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか。

○対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか。

○学びの深まりをつくりだすために，子どもが考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか。



Akitaractive Eye
主体的・対話的で深い学びのために　vol.02

2 「見方・考え方」が働くようにするために

◇これまでの学習を踏まえる　◇多様な展開を考える

音楽的な見方・考え方は，「音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，生活（や社会，伝統）や文化などと関連付けること」であると考えられています。〔共通事項〕（特にア）と深く関わっていることが分かります。つまり，音や音楽の対象をどういう視点で捉えたり考えたりするのかと言うことができます。
ですから，子どもが「見方・考え方」を働かせることができる授業プランを考える必要があります。題材の中に「音や音楽を捉える場面」や「生活（や社会，伝統）や文化などと関連付けて考えていく場面」があるかを確認し，多様な展開を検討しましょう。

3 気付きを生かした展開にするために

◇子どもの思考の流れに沿って展開する　◇想定外の反応にも柔軟に対応する

音楽科は，音楽表現をしたり音楽を聴いたりする過程において「心が動かされる」ことが原動力となり，成立する教科でもあります。その「心が動く」場面，つまり気付いたことや感じたことなどを言葉や音楽で伝え合ったり，音楽的な特徴について共有し，共感しながら，自分なりの考えをもったり，音楽に対する価値意識を構築・更新したり広げたりしていく過程にこそ意味があります。
大切なのは，子どもの気付いたことや感じたことを実際に歌い試したり演奏してみたりするなど，言葉とともに「音や音楽」で表現したり聴いてみたりしながら確かめることです。

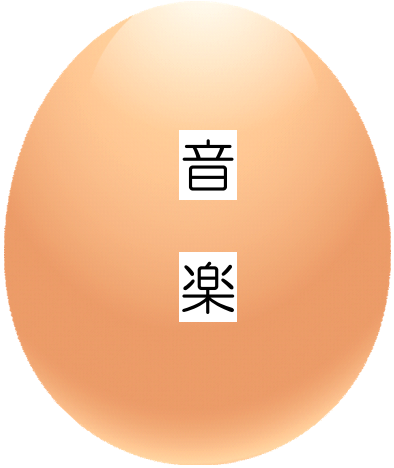
4 問題解決における一連のプロセスを重視するために

◇子どもの試行錯誤を大切にする　◇獲得した学びをまとめる場を設定する

音楽科においては，「音楽的な見方・考え方」を働かせて，他者と協働しながら，音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさを見いだしたりするなど，「思考・判断し表現する一連の過程」を大切にした授業づくりがポイントとなります。「表現領域」においては，〔共通事項〕の学習との関連を図り，知識や技能を得たり生かしたりしながら音楽表現を工夫し，どのように表すかについて思いや意図をもち，実際に歌ったり楽器を演奏したり音楽をつくったりする過程です。「鑑賞領域」においては，〔共通事項〕の学習との関連を図り，知識を得たり生かしたりしながら曲や演奏のよさなどを見いだし，言葉で表して交流するなどして音楽を味わって聴く過程です。
また，題材や１時間の中でのまとめにおいても，音や音楽を伴った実感のあるものにしましょう，

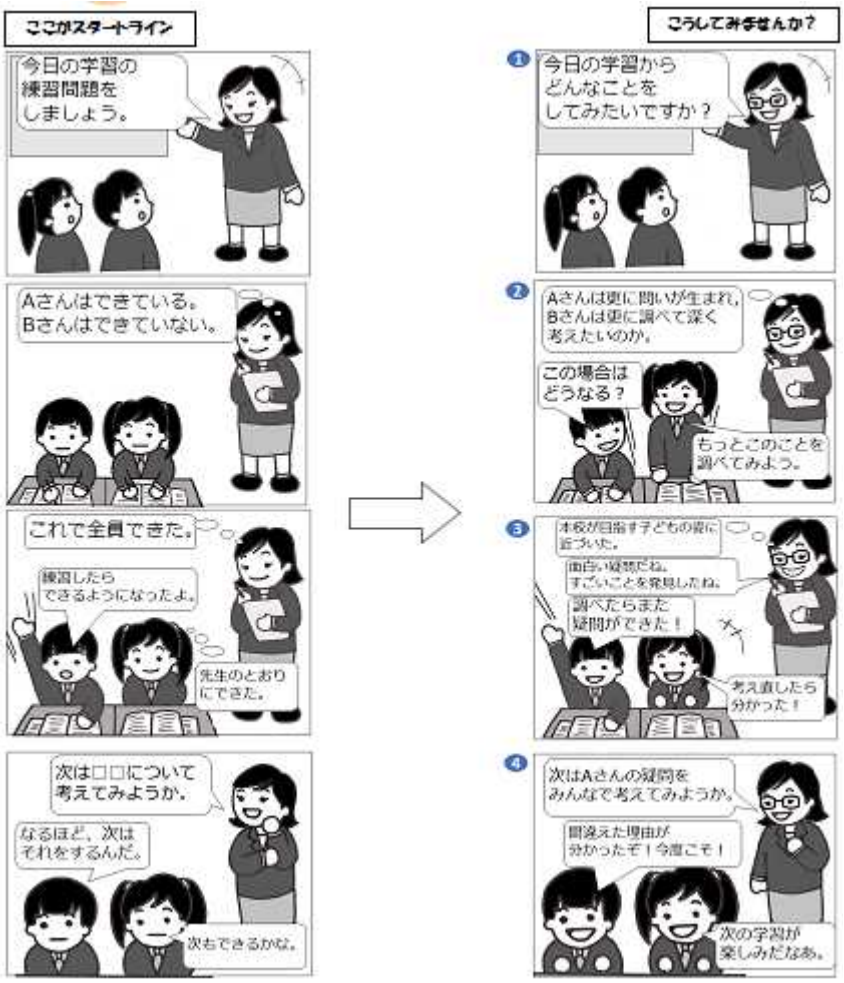
学びの獲得と
新たな学びの創出

連続する学びは力へ。
新たな学びの獲得と新たな学びを創出する。



キーワード

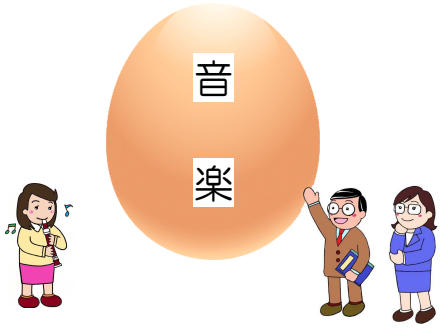
「音や音楽」との関わり



1 活用・発揮を促すために

◇学んだことが生かされる場面を設定する　◇振り返りから課題を引き出す

　そもそも音楽科は，生活や社会の中で音や音楽文化と豊かに関わる力を身に付けることを目指しています。音や音楽が生活に果たす役割を考えさせるなど，音や音楽と生活や社会との関わりを子どもが実感できるような指導を工夫しましょう。しかしそれは，全ての授業で関わらせるということではなく，題材や学年が終わったときに，卒業して社会に出たときに，という視点やスパンで意図的・計画的に育成します。
　また，音楽科における「知識」は，「聴き取った（知覚）ことや感じ取った（感受）こととの関わりについて自分なりに理解したことを，新たな音楽表現で活用しながら更新し，表現や鑑賞に生かす喜びを感じることができるもの」，つまり「生きて働く知識」となるように指導を工夫する必要があります。そのことが，「次はもっとこう表現してみたい」や「今度はもっとこういう曲を聴いてみたい」といった次の課題へとつながっていきます。



2　学びを見取るために

◇評価方法を検討する　　◇授業プランを修正する

前述のとおり音楽科においては，「音楽的な見方・考え方」を働かせて，他者と協働しながら，音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさを見いだしたりするなど，「思考・判断し表現する一連の過程」を大切にした学習の充実を図ることが重要となります。したがって，演奏や作品等の出来栄えのみで評価するものではありません。どのようなスタンスを経てその演奏や作品等にたどり着いたかをしっかりと見取る必要があります。いずれにせよ，学習評価はあらかじめ掲げた「目標に即した評価の観点」で行いますが，忘れてはいけないことは，全ての子どもが少なくとも「おおむね満足できる状況（B）」に達することができるように導いていくことが教師の役割であるということです。具体的には，「授業改善のための観点（音楽）」（秋田県教委）よって自身の授業を振り返るなど，学習指導と学習評価のPDCAサイクルにより，常に授業改善をしていきます。

3　学びの実感を促すために

◇子どもの変容を取り上げる　　◇フィードバックして働き掛ける

「主体的・対話的で深い学び」の実現には，学んだことの意味や価値を振り返り，自分自身の学びや変容を自覚できるようにする場面を意図的に設定することが重要です。音楽表現をしたり音楽を聴いたりする過程において心が動き，気付いたことや感じたことなどについて言葉や音楽で伝え合い，自分なりの考えをもったり音楽に対する価値意識を構築したりしていきます。子どもが感じたことの中から全体で共有すべき事実関係をうまく使い，「共感」させることも大切です。

大切なことは，言葉で考えたりやりとりをするだけではなく，実際の「音や音楽」で確認するということです。

4　新たな学びを創り出すために

◇学習全体を振り返る場面を設定する　　◇新たに学びが連続するようにする

本題材や本時の学習活動の成果，学習の過程における達成状況や変容を確認することで，次の学びへとつながっていきます。イメージしたことや感情の働きを振り返り，音や音楽が人間の感情にどのように影響を及ぼしたのかを考えることにより，音や音楽を生活や社会に生かそうとする態度の育成にもつながります。「楽しい活動」を「音楽の学び」にしていくのは，教師の仕事です。

何より，「早く次の音楽の時間にならないかなぁ」と子どもが思い，休み時間には既に音楽室から子どもの発する「音や音楽」が鳴り響くような授業実践を心掛けましょう。

Akitaractive Eye

～主体的・対話的で深い学びのために～